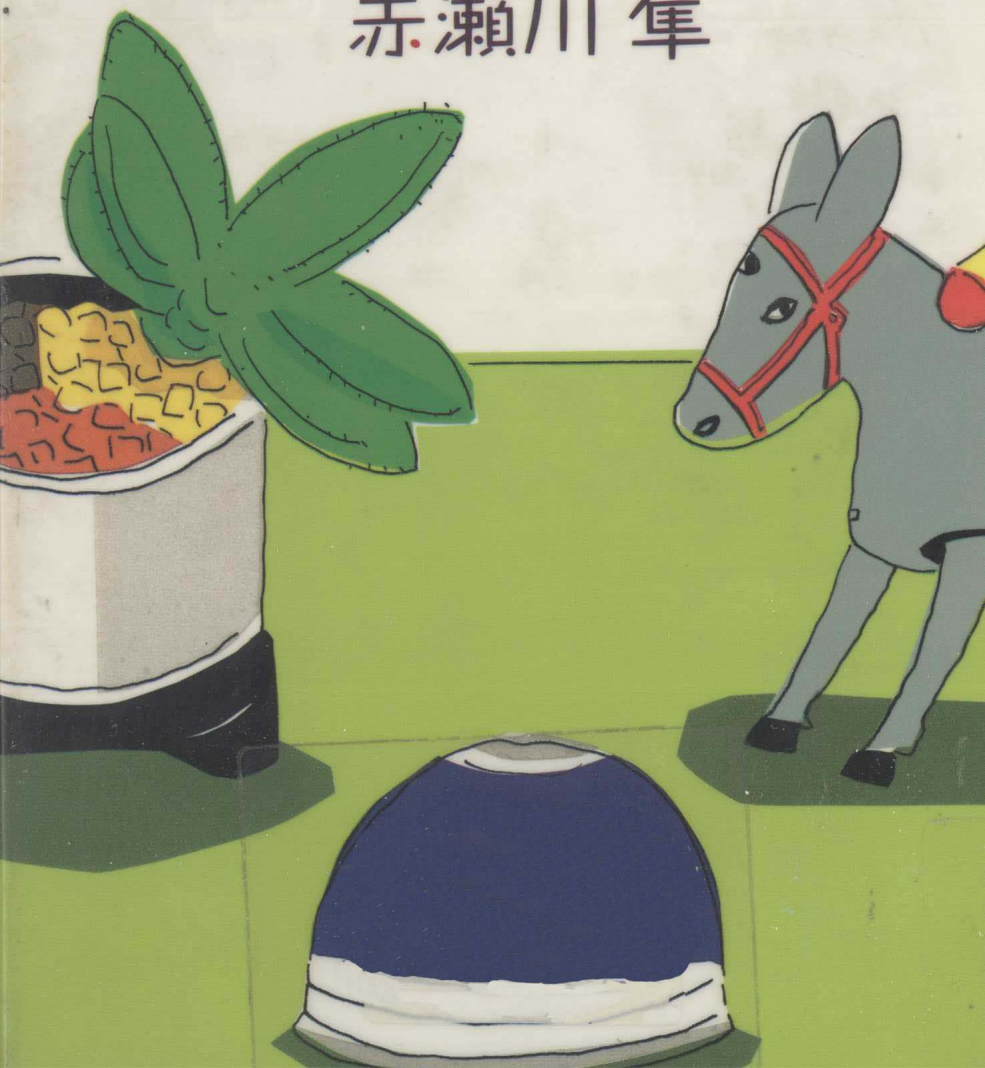


四人の食卓

赤瀬川 隼



四人の食卓

赤瀬川 隼

集英社

よ にん しよくたく
四人の食卓

1995年8月30日 第1刷発行

著 者 あか せがわ しゅん
赤瀬川 隼

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

101-50 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10

電話 編集部 (03) 3230-6100

販売部 (03) 3230-6393

制作部 (03) 3230-6080

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社石毛製本所

検印廃止

乱丁、落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1995 Shun Akasegawa, Printed in Japan

ISBN-4-08-774152-4 C0093

四人の食卓

目次

目次

四人の食卓	7
秋を呼ぶ風	27
夏になれば	47
人ちがい	69
翠 ^{エメラルド} 玉のありか	89

初夏の名残……………	103
ケンブリッジ幻影……………	137
闇の女神……………	155
短冊……………	175
見栄っぱり……………	193
ミミの忘れ物……………	213

装画 安西水丸

装丁 明比朋三

四人の食卓

赤瀬川隼

四人の食卓

目白駅の改札口に迎えに出て十分ほど待っていると、北野藍^{あい}の姿が現われた。

「ごくろうさん」

藍がわたしの家に来るのは仕事がらみだったので、わたしの口から自然にそのことばが出た。
「ごくろうさんだなんて……。あたしは遊びに来たつもりですよ」

「まあ、それもあるけど」

わたしたちは目白通りを歩き出した。

たしかに遊びが主ではある。今日の仕事といえば、新開発の医薬品についての短い説明書を、彼女にドイツ語に翻訳してもらった原稿の受け渡しだけで済んでしまう。その場で眼を通そうにもわたしはドイツ語がほとんどわからない。三十年以上も製薬会社に勤めてきたのに、さっぱり駄目である。北野藍の翻訳原稿は、来週会社に出たときに、しかるべき部課の人間に検討を託すことになる。

それに、土曜日の今日どうしても受け取っておかなければならないものではなかった。来週彼女が会社に届けてくれればよい。元来、仕事ならそれが当たり前であらうし、今までもそうだった。あるいはフアクシミリでも済む。

ところが、きのう彼女から会社で電話があったとき、わたしが手帳を繰りながら来週会う日時を決めかねていると、彼女が言った。「一度、雑司が谷を案内してくださるというお約束でしたね。お差し支えなければ、あした、お届けがてらお邪魔していいでしょうか」

わたしに、ほのかな幸福感が訪れた。わたしのほうから、いつ藍を誘おうかと思っていたこ

とてもあった。ところが、いつだったかたしかに「一度遊びにいらっしやい。雑司が谷界限を案内するよ」と言ったとき、藍の反応がそれほど乗気とは感じられなかったのである。「ええ、そのうち」といった感じだった。それで、わたしのほうから切り出しかねていたのだった。

「もちろん、いいですよ」「あしたの天気予報は晴れだそうですね」「そりゃ、よかった」

電話の藍の声は明るく弾んで聞こえた。わたしの胸も明るく弾んでいた。

そして、早春の陽がおだやかに降り注ぐ午後二時、わたしは北野藍と、雑司が谷の我が家に向かつて歩いている。

「埼玉だっけ、大学の講師の仕事は面白い？」

「味気ないですよ。学生の反応は鈍いし……。あたしの教え方も駄目なんでしょうけど」

「そんなことはないだろう」

藍は、ある大学の非常勤講師としてドイツ語を教えるかたわら、わたしの会社がときどき頼むような翻訳のアルバイトをやっているのだ。

「味気ない仕事をやりながら、いつのまにかもう四十……」

「まいったなあ。こちららは、味気ない仕事をやりながら、いつのまにかもう五十……」

「おたがい、少しサバを読みましたね」

「ハハハハ。いや、あなたの場合は、逆サバだね。三十そこそこにはしか見えない」

「牛島さんのお世辞を初めて聞きました。牛島さんだって、四十いくつの感じ」

「北野藍さんのお世辞を初めて聞きました」

わたしが五十六歳で、藍が四十一であることは、おたがい知っている。

目白通りから鬼子母神へ折れる入口まで来た。

「ちょっと寄り道になるけど、鬼子母神に寄ってから家に行こうか。安産や子育ての神さまだ

そうだ」

さつき家を出るとき、亮一に言っておいた。「翻訳の仕事を届けにくる人がいるから、駅まで迎えに行ってくる。そこらへんを片付けといてくれよ」

亮一は澄ました顔で言った。「女の人だろ」「おまえ、勘がいいな」「お父さんの顔に出てるよ」「どう出てる」「さつき、取っ替え引っ替えお洒落をしようとしてたし」「余計な観察するな。ところで、おまえの今日の予定はどうなんだ」「お二人にしてあげたい気持はヤマヤマなんだけど」「こら、妙な氣を回すな」「どんな氣？ 別に回してませんよ。ただ、ぼくのところにも今日、友達がくることになってるんだ」「そうか、女の子だな」「おやじ、勘がいいな」「同病相憐れむ。いや、ちがうかな。それで、何時頃だ」「電話待ち」

わたしは、息子とのそんなやりとりのあとで出てきたのだった。

妻を亡くして四年になる。その前年に、娘の静香が結婚して、今は夫の転勤で四国の今治に住んでいる。父の代からの雑司が谷の家は、わたしと、二十七になる息子の亮一の二人住まいになっている。十年前までは、父母、わたしたち夫婦、それに静香と亮一と、三代六人で暮してきた。やがて父母があいついで逝き、静香が結婚して去り、そして妻の死——この変化はかなり急だったといってよいだろう。

石畳の参道に入った。

「あら、鬼子母神の鬼の字、頭のチョンがないんですね」

「うん、ツノを取られちゃった。ツノのない鬼なんて、さまにならないけどね」

「昔からですか。ここだけですか」

「さあ、知らない。北野さん、鬼っ子といういいかたがあるでしょ」

「聞いたことがあります。両親のどっちにも似てない子とか」

「そう、それから、生れ落ちたときに歯が生えてた子とか」

「うわ」

「安産と子育ての神としては、そのままじゃ縁起でもないど、いつかだれかが考えたんだろうね」

わたしは藍に、十歳ぐらいのころ母から聞いた言い伝えを手短に語る。もともとは子供を片っ端から食べてしまう悪神だった。それがお釈迦様からさとされて改心し、ツノを取って善神となった――。

「お釈迦様、そうすると昔は仏教のお寺だったのかしら」

「そうかもしれない。全体が何となくお寺っぽいよね」

わたしは、一息おいて藍に言う。

「でも、ぼくは、ツノをつけたままでよかったのと思うね」

「でも、子供を食べちゃうんですよ。悪神のままですよ」

「だから、そういう逆説的な存在のほうが、靈験あらたかで、かつユーモラスな感じがする」

「逆説……靈験……ユーモラス……」

「いや、まあ、そんなに考え込まないでよ」

「考えちゃいけませんけど」

境内に入った。老人がいる。幼児がいる。鳩がいる。ブランコがある。公孫樹^{いちじく}の巨木が屹立している。わたしが子供のころから見慣れている風景である。

「いいですねえ……」

「そう？」

「あのお爺さんと赤ちゃん、あれはお孫さんじゃなくて、曾孫^{ひいこ}じゃないかしら」

「ふーん……」

言われてみればそうかもしれない。

藍は、鬼子母神の境内をいたく気に入った様子である。わたしは、まずここに案内してよかったと思ったが、そうゆっくりしてもいられない。わたしの家まで行って、とりあえず彼女の翻訳原稿を受け取っておきたい。

そんな簡単な受け渡しなら、家に案内するまでの途次でできることだが、わたしは、息子の亮一のいるところで、藍と仕事のやりとりをしたかったのである。「翻訳の仕事を届けにくる人がいるから、駅まで迎えに行ってくる」――。そのとき亮一がすかさず「女の人だろ」と言ったのが気になっている。だから、できるだけ早目に家に戻って、わたしと藍の仕事ぶりを少しでも亮一に示しておきたい。

――亮一のところには、もう女友達から電話があったかな……。

そんなことを考えながら、わたしは藍をうながして家に向かった。

ブザーを押したが、亮一の出てくる気配はない。ドアのノブを回すと鍵がかかっている。

「おかしいな。息子がいるはずなんだけど」

わたしは藍に背中を向けたままそう言っ、ポケットから鍵を取り出した。

ダイニング・ルームと洋風の居間兼応接室が間仕切りなしで続いている。わたしはその応接室に藍を通し、二階に向かって「亮一」と大声で呼んでみたが返事がない。ふと、ダイニング・テーブルに眼をやると、何やらメモらしきものが灰皿で押さえてある。

電話があつたので、ちょっと出かけてきます。

わたしが留守にしているあいだに、亮一にガール・フレンドから電話がかかったようだ。「ちょっと出かけてきます」というのは、そのまま二人でどこかに行くのか、あるいはわたしと同じように、家に案内するために迎えに出たのか、さっきの口ぶりからすると後者だと思うが、わたしのところに客が来ることを知ってから気が変わったかもしれない。さっき亮一は「お二人にしてあげたい気持はヤマヤマなんだけど」とわたしを冷やかしたが、案外自分たちのほうが二人きりになったかどうかのだろう。

そんなことをちらちらと頭に浮かべながら、わたしはその場でコーヒーの支度にかかった。藍がコーヒーを好きなのは知っている。

「牛島さん、お構いなく」

「うん、どうせぼくはコーヒーしか作れない」

「ふだん、お食事はどうなさってるんですか。亮一さんでしたっけ、息子さん」

「うん、亮一がやる。男のくせにそういうことがわりあい好きでね」

「あら、最近の男の人って料理の好きな人、多いですよ」

「そうらしいね」

そういう男友達は何人かいるんだろうね、と言おうと思ったが、やめた。

コーヒーを運ぶ。藍から翻訳原稿を受け取る。藍は、わたしの淹れたコーヒーの味をほめた。そして、家の竹^{たけ}まいをほめた。

「おやじが元気な頃、かれこれ二十五年ぐらい前かな、一度増改築してね、三世代十人ぐらいは住める家にしたいといって。でも結局今は、男二人」

「でも亮一さんが結婚なされば」

「さあ、どうなるんだか。今の都会の若い夫婦は二人だけで生活を始めるのが普通みたいだしね」

「もったいない」

「たしかに、もったいない」

亮一はなかなか帰ってこない。今度はわたしがメモを残すことになった。

霊園あたりまで散歩してくる。

藍から受け取った翻訳原稿は仕舞わずに、亮一の眼に触れるように居間のテーブルの上に置いたままにした。

わたしは、今日のような機会にさりげなく、北野藍を亮一に紹介しておきたいと思っていた。それに偶然、亮一のところにも女友達が訪ねてくるという。当然、どんな女性かということにも興味があった。ぜひそれが必要というわけではないが、鉢合せする機会に四人が知り合いになっておくのも面白いではないかと思っていた。しかし今のところ、そのもくろみはいずれも外れている。今日はこのまま、二組が出会わずに終ってしまいそうだ。もし、わたしたち二人がさつき鬼子母神に寄り道していなければ、あるいは亮一の出かける前で、藍を紹介することだけはできたかもしれないが。

わたしは藍をうながし、家を出た。

「住むにはいいところですけどねえ……」